

被災地派遣レポート〈第33回〉

選挙管理委員会事務局総務課 田宮 抄子さん

■福島県庁へ

9月14日から21日までの7泊8日、福島県第18陣として支援業務に参加させていただきました。

福島県派遣の前週に、宮城県へ選挙事務支援のため出張しており、県南部の亘理町をはじめ、仙台市、県北部の女川町、石巻市を訪問しておりました。地震発生から既に半年が経過したにもかかわらず、目の前に広がる状況に呆然とするばかりで、「復興に向けて前に進みつつある」という私自身の認識は、限られた情報による勝手な解釈であることを痛感したばかりでした。

このような背景もあり、少しでもお役に立てればと考えて参加したのですが、同じ「被災地」でも状況が異なることを改めて感じるようになりました。

■従事内容について

私が配属された福島県土木部建築住宅課応急仮設住宅入居促進・管理支援チームは、主に県内各所に設置された応急仮設住宅・借上げ住宅の建設から入居までの管理を担当しています。私の担当業務は、仮設住宅の建設戸数の推移や、入居戸数・人数の日々の変動を把握し、外部に公表する基礎資料を作成することでした。

福島県では、放射性物質拡散の影響により、東京電力福島第一原子力発電所から20キロ圏内への立入り制限をはじめ、計画的避難区域、緊急時避難準備区域が設定されています。そのため、飯舘村のように避難を余儀なくされている自治体も存在します。

ある時、入居戸数・入居人数の確認で、飯舘村役場へ連絡をしたときのことでした。電話口に出られた担当者と数字の確認作業を終えた後に突然、「田宮さん、どちらから来られたのですか」と言われたのです。

福島県内には、県庁だけでなく各市町村まで、国の機関や各地の県や市から、多くの方が派遣されています。担当者の方は何気なく聞かれたのでしょうが、私は一瞬、答えることを躊躇しました。「東京都からです。」そう答えたら、電話の向こうではどう思うだろうか。複雑な感情が心をよぎるのではないか。こんなことは前週の宮城県派遣の際は、考えたこともありませんでした。

私の心配をよそに、担当者は「東京からですか、それは本当にご苦労さまです。そうそう、実は敬老の日に村の仮設住宅でイベントがあるのですが、良かったらいらっしゃいませんか。」

正直、少々面食らいながらも、その日は県庁での業務があったので、申し訳ない気持ちでお断りしました。すると、「残念ですね。でも、飯舘村の人間は、こんな状況でもみんな前を向いているってことを、東京の人たちにもぜひ伝えてください。」

その言葉に、私は新聞記事からもテレビからも感じたことのなかった、困難に向き合う強い意志を感じました。その気持ちに伝えたいと思いながらも、御礼を言うのが精一杯でした。

その後、飯舘村の担当者から報告用の資料と共に、「参考までに」と仮設住宅のイベントのチラシがFAXで送られてきました。それを見て、担当者が伝えようとした気持ちを東京でも伝えていこう、と強く思ったのは言うまでもありません。

私が東京に戻る日は、台風15号が日本列島を北上しており、被災地でも甚大な被害が発生しました。ニュースで、須賀川市の仮設住宅が床上浸水との話を聞いて、そこで暮らしている方々のこと、現場で避難に携わっている市の職員、そして深夜まで対応している県庁の職員のことを頭に浮かびました。

■最後に

今回、続けて被災地へ派遣の機会をいただいたことで、今まで以上に被災地に関連したニュースなどに関心をもつようになりました。記事を読みながら、派遣先でお世話になった方の顔が浮かび、自分のこととして捉えようという気持ちの変化が現れたことは、自分でも驚きでした。これも現場の空気を、自分の身体で少しでも感じる事が出来たからだと考えています。

最後に、ご指導をいただいた福島県庁の職員の皆様、派遣をサポートして下さった総務局福島県事務所、被災地支援課の皆様、そして快く送り出してくださった職場の皆様に心より感謝いたします。